

[研究ノート]

心理学における「曖昧さ」について (1)

—— 曖昧さの分類と定義 ——

吉 川 茂

“Ambiguity” in Psychology

—— classification and definition of ambiguity ——

Shigeru YOSHIKAWA

は じ め に

現在のコンピュータ開発には、生物のもつすぐれた情報処理機能を応用しようとする大きなトレンドが認められる。なかでも人間の言語や推論にみられる「曖昧さ」が注目され、ファジィ理論が提唱されてその応用での成果は顕著である。今後ますます「曖昧さ」という概念は数学や知識工学のなかに取り入れられ、コンピュータ科学の発展に寄与するものと思われる。そこでそれらの基礎として、応用に役立つかどうかは別として、いちど人間心理の立場に戻って「曖昧さ」について考えてみたい。

なお今回はいくぶん観念的なところもあるが、サブ・タイトルに示すように「曖昧さの分類と定義」について扱うこととし、このあと視覚情報の曖昧さ、社会対人状況における曖昧さ、その他関連領域での曖昧さも含めて、問題をより実際的な方向へと拡充していく計画である。

1. 心理学と曖昧さ

心理学において「曖昧さ」そのものに純粋に関心が寄せられたことはかつてなかった。心理学もその学問の性質としてはやはり一般の科学と同じく、「曖昧さ」をできるだけ排除して、合理性、論理性を求めてきた。Fechner, G.T. (1860)による『精神物理学要綱』をその出発点とみなすこともできよう。また、Wundt, M.やFreud, S.それにJung, C.G.などのように人間の意識や無意識、内観といったいくぶん曖昧と思われる概念内容を対象とした研究もみられたが、それらとて心理構造の解明や法則性の発見を志向してきたのである。

それでは、このように「曖昧さ」を排除しようとする傾向にありながら、「曖昧さ」が取り

あげられるようになったのはどうしてであろうか。表面的には2つの経路を見出すことができる。曖昧さへのトレランス(Ambiguity Tolerance)と創造性(creativity)の2つである。

◎ 曖昧さへのトレランス

曖昧さへのトレランス—イントレランスという概念は、Fromm, E.やAdorno, T.W.らによるファシズムや人種的偏見などの人格構造についての社会的あるいは社会心理学的考察の流れを汲みつつも、Frenkel Brunswik, E.(1948)が情緒的・知覚的なパーソナリティ変数として心理学の領域に導入したのが最初であった。Frenkel Brunswikは曖昧さへのイントレランスをつぎのように述べている。「蓋然性なるものを考えることを嫌悪し、白か黒かとステレオ・タイプの決めつけを好み、数学を解く場合のように、知的課題を解くにあたってメンタルなセットを捨て去ることができず、後に適切性の欠如に陥る」さらに1949年にはこう述べている。「価値判断の面に関して、白黒をはっきりさせるという解決手段に頼り、早急で未成熟な結論に達し、ときとして現実の無視に至ることもあり、総体的に、絶対的で明確な他人への承認や拒絶を求めようとする傾向」これらのなかでは曖昧さに関しての説明はきわめて断片的である。

つぎのEnglish, H. B. & English, A. C. (1958)による曖昧さへのトレランスの記述においても曖昧さの説明はごくわずかである。「交替可能な解釈事柄、交替可能な結果を喜んで受け入れること、たとえば、対立する主義が混合する複雑な社会的問題に直面したときの気楽な気分。(あるいは少なくとも不快な気分ではない)そして曖昧さへのトレランスの低いことは、あらゆるものを白と黒に分解しようとする願望に示される」——トレランス—イントレランス反応は、曖昧さという前提条件、つまり曖昧な刺激が呈示された後の反応の問題と考えられたため、曖昧さとは何かという見解が整理されないままでは、その後の実験や理論の展開に支障をきたすのは明らかであった。しかしながら初期の段階では、曖昧さへの関心は希薄なままであった。曖昧さそのものの分類や定義についての積極的な取り組みにはBudner, S.を待たねばならない。

◎ 創造性研究と曖昧さ

創造性の研究領域における曖昧さを考えるとき、「自我による自我のための一時的部分的退行と進展」(temporary and partial regression and progression in the service of ego)を提唱したKris, E., 意識・無意識両過程から解放された前意識(preconscious)過程の自由な活動に注目したKubie, L. S.この2人があげられる。創造性は意識的論理性に支配されたところから誕生するのではなく、それが曖昧な心理的領域または層が創造性の母体であるというのが共通した考え方である。ただし一次過程(primary process)や前意識過程の曖昧さについてはやや観念的に述べられている程度であり、具体的な分析はなされていない。

曖昧さへのトレランスを創造的な人物の特性の1つとして指摘した研究は数多く認められる。

創造性の高低両者の特徴を84項にまとめたTorrance, E. P. (1962), 研究開発グループを扱ったSaunders, D. R. (1963), 芸術家と非芸術家を比較したEiduson, B. T. (1958), 連想の円滑な者, 独自性の強い者について調べたGuilford, J. P., Christensen, P. R. (1957) などがある。しかし, これらの創造性研究では曖昧さへのトレランスというパーソナリティ特性をたんなるユニットとして利用しようとの意図がみられ, 曖昧さという問題への直接的関心は薄かった。

また各種の創造性検査においては, 拡散的思考を評価する目的で多様な解答を許容したり促進したりする形式の課題が考案されている。こうした点では曖昧さという概念も形式上含まれているかもしれないが, 明確に意識してそれを取り入れているとは考えられない。すなわち課題のもつ曖昧さの種類や程度といったことまでは考慮されていない。

以上のことをまとめて, 創造性研究においては曖昧さはさまざまに関連させられるけれども, まだまだ副次的な扱われ方にとどまっているといえる。

2. 曖昧さの定義と分類

曖昧さそのものを積極的に定義し分類しようとした研究者として, Budner, S.とNorton, R. W. がいる。どちらも曖昧さへのトレランス研究のなかでこの問題を論じている。

Budner (1962) は, 曖昧さへのイントレランスを「曖昧な状況を脅威の源泉として知覚する, すなわち解釈する傾向」であるとの定義を示した。そしてそれには「曖昧な状況」の性質と「脅威の源泉として知覚する」ことの意味とが明らかにされる必要があると続けている。この定義の2要素のうちの「曖昧な状況」については, 「十分な手掛かりが欠如しているために, 適切に構成できなかつたり, カテゴリー化できなかつたりするような状況」と定義し, これに該当する状況をつぎの3つに分類している。

新奇さ (novelty) …… 熟知した手掛かりがない, まったく新しい状況

複雑さ (complexity) …… 考慮すべき手掛かりがたいへん多くある複雑な状況

不可解さ (insolubility) …… それぞれの要素あるいは手掛かりがそれぞれの構成を示唆するような矛盾した状況

一方Norton (1975) は曖昧さの定義を得るため, 1933年から1970年のPsychological abstract に記載された曖昧さを扱う記事内容を綿密に分析した。全部で125の「曖昧な (ambiguous)」という語の使用例が抽出され, それらは8つのカテゴリーに分類された。Table 1には8つのカテゴリーの解説とそれぞれの使用パーセントが示される。ただし, あるカテゴリーの要素は他のカテゴリーの要素と相通じているとされ, これらカテゴリーは独立したものではなく, また分類方法に組織的な基準が示されていない。

Table 1. 「あいまいな」という語の使用例の分類

(Norton, 1975)

カ テ ゴ リ ー	使 用 の パーセント
<u>I. Multiple Meanings</u> : 刺激はそれが少なくとも2つの意味を伴えば、人が多数の意味に気づいても、気づかなくてもいずれにせよ、研究者はその刺激をあいまいであるとみなす。	28%
<u>II. Vagueness, Incompleteness, Fragmented</u> : もし全体のある部分が欠けていたらその刺激はあいまいであると指摘される。例えば不完全な輪郭線、あるいは断片的な図形などが含まれる。	18%
<u>III. As a Probability</u> : 蓋然性の機能をもつとして分析できるならば、あいまいであるとして扱われる。例えば Broen(1960)は、蓋然性への反応の解釈のさまざまな結合について、あいまいさを操作的に扱った。	12%
<u>IV. Unstructured</u> : 明白な組織のない、あるいはただ部分的にのみ組織をもつ刺激はあいまいであるとみなされる。	10%
<u>V. Lack of Information</u> : 情報の全くない、あるいはほとんどない状況はあいまいな状況として扱われる。	9%
<u>VI. Uncertainty</u> : あいまいさは、それが作りだす精神状態、つまり不確実さと同じであると考えられる。	9%
<u>VII. Inconsistencies, Contradictions, Contraries</u> : 矛盾した情報を伴ういくつかの刺激あるいは刺激のセットはあいまいであるとみなされる。例えば一組の情報が、あるものを同時に、Xであって、しかもXでないと示唆すれば、その一組の情報はあいまいであると呼ばれるだろう。	8%
<u>VIII. Unclear</u> : あいまいさは、しばしば不明瞭という語と同義に使用される。例えば、McBride と Moran (1967)は、あいまいでないものとは、陳述の明快さとして手短かに述べられる次元として定義した。	5%

◎ 他の分野における曖昧さの分類

曖昧さの分類は学問分野や研究者の立場によって異なってくる。工学関係のなかでもフェジィ(fuzzy)と関連して曖昧さについて述べられることが多いようである。向殿政男(1988)は曖昧という言葉の意味するところとして以下の5つをあげている。

1. 知識が不足していて、よくわからない。(incomplete)
2. 解釈が何通りもあってわからない。(ambiguity)
3. 未来のことなのでわからない。(randomness)
4. 正確でない。(imprecision)
5. 定義できない、または定義しても意味がない。(fuzziness)

石塚 満(1986)は知識工学の分野において開発され利用されてきた曖昧性をつぎのように分類している。

1. 制御の非決定性(non-determinism)
2. 多義性(multiple meanings)

3. 不確実性 (uncertainty)
4. 不完全性 (incompleteness)
5. ファジィ性 (fuzziness or imprecision)

これまでは曖昧さを曖昧さへのトレランスの問題から着手してきたため、「ambiguity」を主として考えてきたが、上記の分類などをみても曖昧さに対応する、あるいは曖昧さを意味する英語は数多いことがわかる。他にも vague, equivocal, evasive, doubtful, obscure, noncommittalなども辞書に見つけることができる。意味のうえから twilight という語の使用もみられる。これらのことからすれば「ambiguity」も曖昧さ全体のなかの比較的限定された意味内容をもつことになる。言語の意味として考えるならこうした取り扱い方は妥当である

Table 2. 不確かさを表わす日本語形容詞の分類 (菅野, 1988)

あいまいな (3)	怪しい (2)	あやふやな (6)	ありそうな (1B)
いいかげんな (4)	意外な (1B)	いかがわしい (2)	偽りの (4)
いぶかしい (2)	いろいろな (1A)	うさんくさい (2)	疑わしい (2)
うっとうしい (4)	うつろな (4)	うやむやな (4)	おおかたの (7B)
おおざっぱな (7B)	臆測的 (7A)	臆断的 (7A)	起こりそうな (1B)
おざなりの (4)	おぼつかない (4)	おぼろげな (4)	おぼろな (1A)
思いがけない (1B)	およその (7B)	懷疑的 (2)	蓋然的 (1B)
確率的 (1B)	架空の (2)	かすんだ (1A)	仮想の (2)
可能な (1B)	仮構の (7A)	気がかりな (4)	近似の (7B)
偶然の (1B)	くすんだ (1A)	傾向の (1B)	心もとない (4)
混沌とした (1A)	雑然とした (1A)	雑多な (1A)	様々の (1A)
自由な (5)	主観的 (7A)	心情的 (7A)	随意的 (5)
折衷的 (5)	選択的 (5)	想像の (7A)	ぞんざいな (4)
だいたいの (7B)	多義的 (3)	妥協的 (5)	多值的 (7A)
たまたまの (1B)	多面的 (7B)	玉虫色の (5)	多様な (1A)
中間的 (7A)	中途半端な (4)	直観の (7A)	ときたまの (1B)
突然の (1B)	鈍感な (4)	任意の (5)	灰色の (1A)
漠然とした (4)	半信半疑の (2)	非科学的 (7A)	非形式的 (7B)
非系統的 (7B)	非決定的 (5)	非合理的 (7A)	非実在的 (2)
非組織的 (7B)	非体系的 (7B)	非必然的 (1B)	非明示な (3)
非証明的 (1A)	非理性的 (7A)	非論理的 (7A)	不安な (4)
不意の (1B)	不可解な (2)	不不確実な (6)	不確定の (5)
不可測の (2)	不完全な (7B)	不規則の (7B)	不規律な (7B)
複合の (7B)	複雑な (1A)	不決断の (5)	不見識な (5)
不思議な (2)	不十分な (6)	不詳の (2)	不条理な (7A)
不審な (2)	不正確な (6)	不精確な (6)	不整合な (7B)
不整な (7B)	不鮮明な (1A)	不測の (2)	不ぞろいの (7B)
不確かな (6)	不調和な (7B)	不定の (5)	不適格な (7B)
不的確な (6)	不適確な (6)	不適当な (7B)	不徹底な (7B)
不同の (7B)	不透明な (1A)	不特定の (1A)	不備な (7B)
不分明の (4)	不明確な (3)	不明な (2)	不明白な (1A)
不明瞭な (1A)	不慮の (1B)	放心状態の (4)	漠然とした (1A)
ぼけた (4)	没論理的 (7A)	ほのかな (1A)	ぼやけた (1A)
まぎらわしい (1A)	まばらな (1A)	未確認の (2)	未完の (7B)
未決の (5)	未詳の (2)	未定義の (3)	未定見な (5)
無辺の (1A)	無目的な (5)	申し訳の (4)	もうろうたる (4)
模糊たる (1A)	優柔不断な (5)	ゆううつな (4)	予想外の (1B)
両義的 (3)			

と思われる。以後いったん「曖昧さ＝ambiguity」から離れてしばらく話を進めていきたい。ただし曖昧さへのトレンスにおける「ambiguity」はいわば曖昧さ全体の総称として用いられることをことわっておく。

◎ 不確かさと曖昧さ

さて、曖昧さという用語もそれを含むより大きい概念の一部であるという視点に立つと、菅野道夫(1988)の不確かさを表わす日本語の形容詞の分類がたいへん参考になる。すなわち曖昧さ(不確かさ)の概念の広がりと相互関係が整理して示される。それをTable 2およびFig. 1に引用して示す。

菅野はこの不確かさのカテゴリーのなかでも特に本質的と思われるものを3つあげている。

1. 蓋然性……確率などを含む現象に関係する。
2. 曖昧性……言葉や概念に関係する。
3. 漠然性……感情、観念に関係する。

これらのうち、感情・観念にまつわる漠然性についてはサイエンスのやり方でアプローチするのは困難であるとの意見が述べられている。この漠然性に属する語にはどのようなものがあるかすこし集めてみると、「不安な」「気がかりな」「放心状態の」「おぼつかない」「うつろな」などがある。これらはまさに人間の心理を表現している語であって、こうした漠然性と関わろうとするとところにエンジニアリングとのちがいが見出せる。菅野(1978)は「とくに、工学の場でものごとのありさまや状態を記述するのに使われる形容詞は、ほとんど量に関係している」と述べ、工学と心理学とにおける曖昧さの相違点を示唆している。心理学では刺激の性質の数量化や測定を客観的に扱うことともに、場合によってはそれ以上に、主観的な反応のほうに関心がもたれ重要視されるのである。

◎ 曖昧な刺激に対する人間の反応

刺激に対する個人の反応には少なくとも2つのレベルがあり、それはphenomenological とoperativeであるとBudnerという。前者は個人の知覚や感覚の世界で生起し、後者は自然や社会的対象の世界で生起する。つまり個人は一方で知覚し、評価し、感じを受けるととも

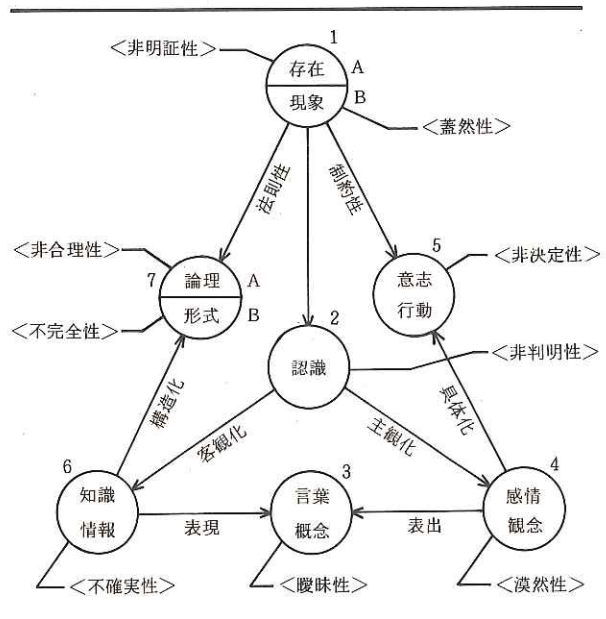
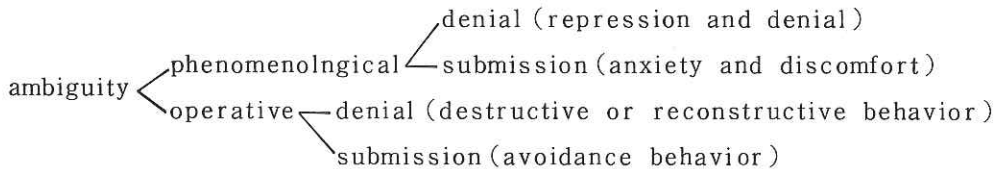


Fig. 1. 不確かさの構造 (菅野, 1988)

に、また一方では外部の環境に対してある様式で行動し、活動するというのである。

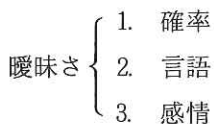
そこでもし曖昧な刺激を脅威として知覚したときの反応はどうであろうか。Budner は submission と denial とに二分されると考える。submission とは、個人が改変できない不可抗力の事実の存在として状況を認知することである。denial は、たとえ個人の精神内界のことにすぎないとしても、客観的な現実が知覚者の好みに適するよう改変される行為の実行である。図示するとつぎのようである。



phenomenological と operative は次元の異なるレベルであるから排反しない。denial と submission は対立概念である。一例を示せば、曖昧さに対して、精神内界では不安や不快を感じ、目に見える行動としては回避行動をとるといった組合せを選択することもできる。

◎ 曖昧さの種類の要約

ここまで述べてきたところで、もう一度曖昧さの分類に戻って考えてみよう。既述の菅野による不確かさを意味する語の分類を最大限に簡略にして、曖昧さをつぎのように分類してあらわしてみよう。



1.はサイコロをふって出る目が不確か・曖昧であるという例に代表される「確率」としての曖昧さである。当然のことではあるがサイコロ自体が曖昧というわけではない。サイコロをふる、あるいは出る目を予想するという事態に曖昧さが生じてくるのである。そして大切なことは、この「確率」としての曖昧さは、それを人間が曖昧であると感じるか否かに関係なく、確率的な曖昧さとして規定されるのである。これは randomness と呼ばれる。

2.はたとえば「中年」「美人」といった語の意味内容には程度、広がりがあるという例にみられる「言語」のもつ曖昧さである。中年という意味の該当する年齢には範囲があり、各年齢によって該当する程度は異なる。こうした曖昧さは言語に本質的なものと考えられており、やはり人間がそれを曖昧であると感じるかどうかは別として、「言語」の曖昧さとして認められるのである。この種の曖昧さは fuzziness の中心概念の1つである。

3.の「感情」としての曖昧さは、「確率」「言語」が刺激にもなることがあるのとは異なり、刺激ではなく反応としてその人が感じる曖昧さのことを指す。したがってこの「感情」の原因となるべき刺激はその人の外側に存在し、「感情」はいわば内側のものである。「確率」「言

語」もこの感情をひき起こす原因の1つになり得る。しかしそれだけでなく、おそらく非常に多種多様で広範囲にわたるさまざまな刺激によって曖昧な「感情」はひき起こされるであろう。そしてどのような刺激によって、どの程度の曖昧な「感情」が喚起されるかにはかなりの個人差があるはずである。曖昧さの心理的構造という点から分析すれば、「感情」は「確率」「言語」とは次元の異なるものであることがわかる。

3. 心理学的曖昧さの構造

いままで述べてきた内容を整理し、さらにいくつかの説明事項を追加した図をつぎに示す。重複もあるが、この図の説明によって曖昧さの定義・分類をひとまず終了したい。

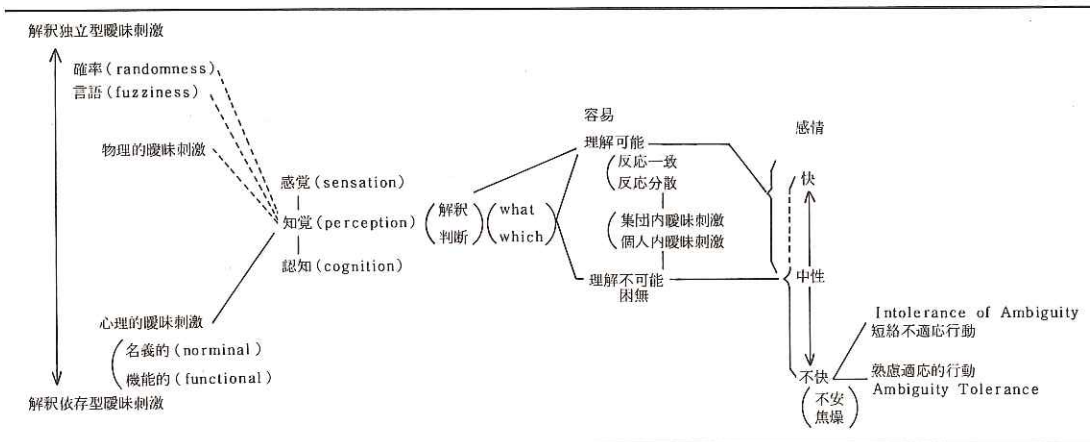


Fig. 2. 曖昧さの種類と成立プロセス

[解釈独立型 vs. 依存型曖昧刺激]

まず曖昧な刺激というものを、それを知覚する（解釈・判断する）人間からある程度独立しているものという視点に立てば、「確率」「言語」「物理的曖昧刺激」の3つをまとめて解釈独立型曖昧刺激と考えることができる。これらは知覚者との関係を抜きにして、それ自身の曖昧性を論議することが可能である。また一定の方法、測度をもってその曖昧性を数量化することもできる。「物理的曖昧刺激」とは、対象となる刺激の明暗、遠近、焦点、呈示時間などの変数を連続的に変化させて得られる曖昧さのことである。

つぎに「心理的曖昧刺激」とは、それ単独では曖昧であるかどうか規定することは難しく、知覚者との関係によっては、つまり知覚者の反応のあり方によっては曖昧であるとみなされる刺激のことで、解釈依存型曖昧刺激と名づけてもよいであろう。実験者がある刺激を曖昧であると想定して呈示したとしても、被験者はその刺激をかならずしも曖昧であるとは受けとらな

い。おそらくこのように知覚されるであろうと想定され期待された名義刺激 (nominal stimulus) と、それが現実作用する機能刺激 (functional stimulus) とはいつも一致するわけでない。

[個人内 vs. 集団内曖昧刺激]

「心理的曖昧刺激」には2つのタイプが考えられる。1つは解釈・判断された結果として個人に反応として曖昧な感情を生じさせるもので、個人内曖昧刺激ともいえるタイプである。もう1つのタイプは個人に曖昧な感情を生じさせることはないが、各個人の反応を集めて集団として眺めた場合に多様な解釈・判断が認められるタイプである。こういう種類の刺激を集団内曖昧刺激としておこう。

Norton はつぎのように説明している。「人は刺激を曖昧なと分類するために、その刺激に曖昧さを見つける必要はない。

古典的な曖昧図形—— 嫁と姑 (Hill, 1915) —— はそのことを示している。その刺激は、人々の何パーセントかは嫁だけを見て、何パーセントかは姑だけを見ているというように構成される。どちらの人々も、もし他の人々が絵のもう一方の面を見ているだろうと考えなければ、自らの解釈について疑



Fig. 3. 古典的な曖昧図形

い、不確かさ、不安を感じない。彼らはその絵を漠然とした、不完全な、断片的なものとは感じていない。彼らはその絵を未組織な、情報の不十分な、明確さの欠如したものとして見ていない。にもかかわらず、研究者がその絵を曖昧であると分類するのは、その絵が被験者群から数種類の反応を引き出すからである」これは一般に多義図形といわれる絵についての説明となっている。

なお、図においては分離してそれぞれを配置してあるが、「確率」「言語」それに「物理的曖昧刺激」がけっして曖昧な「感情」と結びつかないことを意味するのではなく、その可能性はもちろん十分に含んでいる。解釈独立—— 解釈依存という基準を示したものである。

[知 覚]

つぎにそれら刺激の受容に関する過程であるが、図では「知覚」と表示されてある。どんな刺激であっても人とまったく無関係に存在するのみであれば、その刺激はその人にとっては無に等しい。刺激の受容があつてこそ、続いて「感情」も生じてくると考えられるため、刺激と「感情」との間に「知覚」が挿入されている。さて知覚 (perception) は、感覚 (sensation) が「刺激→受容器→求心性神経→感覚中枢という感覚系のみ興奮によって規定されると想定される過程」であるのに対し、大脳皮質での相対的に高次の処理過程を含み「中枢においては、他の単位の興奮状態に影響され、過去の経験の痕跡によって規定され、さらに思考中枢や言語中枢などからの影響も受けると考えられる」(牧野, 1973) とされる。さらに知覚と認知 (cognition) との区別は、「感覚、知覚に比して、他の感覚系、運動系からの影響をより多く

受け、より多く過去経験によって規定され、思考や言語の影響がより多く考えられるような過程を認知といい、より単純な過程としての感覚、知覚と区別することがある」と牧野は説明している。しかし感覚、知覚、認知の区別は便宜的なもので、相対的なものであると述べられている。刺激の種類によって、その解釈や判断にどの程度思考や過去経験との照合が関与してくるかはそれぞれに異なるはずである。解釈・判断が、感覚－知覚－認知という想定された軸上のどのレベルでなされるかは一定でないため、図では厳密な区別を設けず、刺激の受容全体を「知覚」でもって代表させてある。

[which vs. what]

曖昧な(と思われる)刺激を人が解釈・判断する際の心理をもうすこし具体的に考えてみよう。一般の状況下において、与えられた刺激に対してそれが曖昧であるかどうか問題にされることはまれなはずである。「いったい何なのか」「どちらなのか」という迷いの形であらわれ、意識されることが多いであろう。あるいは対処が求められる状況であれば、「どう考えればよいのか」「どちらの処理をすればよいのか」という困惑が生じるであろう。それでも人はこの状況を「曖昧」という言葉でもって把握したりはしない。すなわち解釈・判断というのは、刺激のもつ曖昧さを解釈・判断するという意味ではなく、その刺激を理解するために、あるいは自分なりに納得するために解釈・判断するのである。対象が未知のときには「何なのか」という対応様式がとられるであろうし、対象が既知であっても、その可能選択枝が複数のときには「どちらなのか」「どれなのか」ということになる。解釈・判断における本質的な機能はこうのように、what または which という2つのタイプの疑問が基本となっている。

[解釈・判断の可能 vs. 不可能, 困難]

つぎの段階は、解釈・判断の結果として what または which の解決が可能であったか、あるいは不可能か困難であったかという分岐である。たとえ主観的で誤まった解釈・判断によって解決が得られたとしても、本人に解決でき理解できたという感覚が生じたならばそれは「可能」とみなされる。よって「可能」はかならずしも望ましかったり、価値があったりするわけではない。一方「不可能・困難」の心理状態は、解釈・判断が定まらずに迷い続ける未確定状態である。この状態についての「感情」をつぎに考察したい。なぜなら解決が得られたほうは一応満足できており平穏な心理状態にあると考えられるので、反応はその時点で終了し、特に「感情」を問題にしなくともよい。

[感情]

感情は狭義には、快－不快という一次元的な見解がとられる。しかし図では「感情」を解釈・判断が不可能、困難であることの結果として位置づけており、この流れに沿って不安や焦燥感も含めて考えたほうがわかりやすいと思われる。「何なのか」「どちらなのか」の見通しをなかなかつかむことができないため、対応や処理の方法がわからないのは不安であるし、なんとか早く解決しなければとの思いは焦燥感につながるであろう。これらはたしかに不快にはち

がない。

また快—不快という連続体はこうした事態に対する心理的反応の個人差の広がり示すものである。すなわち知覚の方法が数通りもあったり、一義的に決定されていなかったりする事態に面白さを感じる人がいるかもしれないということである。

これまで『曖昧な「感情」』という表現をたびたび用いてきたが、これは中途半端な感情とかはっきりしない感情という意味でないことを強調しておきたい。曖昧さの知覚、つまりは解釈・判断の不可能、困難によって生じた感情を曖昧な「感情」と呼んできた。それは感情そのものが曖昧ということではなかった。上記の不安にしても明瞭で強度な不安ということもある。疑いのない確実な焦燥感というのも曖昧な「感情」なのである。

◎ 感情そのものの曖昧さ

それに対して精神内界そのものが曖昧だという場合もある。たとえば、睡眠前後の眠くてぼんやりした状態などがそうである。これはある刺激対象への反応により生じた曖昧さではない。むしろこうした状態では知覚は十分に機能せず、一般に顕著に曖昧であるとされる刺激を呈示されたところで、刺激と関連した曖昧さを見出すことができないばかりか、そうした刺激の存在にすら気づかないかもしれない。この状態を示す語には「もうろうたる」「放心状態」「うつろな」「ぼけた」などがあげられる。

このことは覚醒水準 (arousal level) の低さという表現もできる。覚醒とは、有機体が目ざめ、注意し、警戒し、応答するといった活動の一般的水準についてのことである。Hebb, D. O. (1958) の、刺激が行動を誘導する効力と覚醒水準との関係についての図をもとにして、そこへ曖昧さの関連事項を書き加えたのが Fig. 4 である。

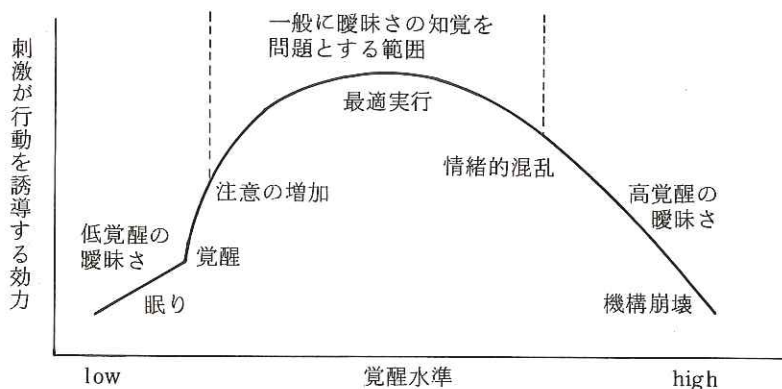


Fig. 4. 覚醒水準と曖昧さの関係

低覚醒 — 高覚醒というのは、刺激の欠如 — 過剰とはまったく異なっていて、個人内部の心理学的問題である。低覚醒状態では、敏感さ、興奮性がほとんどみられず、行動の量、質ともにきわめて低レベルである。いわば精神内界の希薄さ、未構成状態としての曖昧さである。

これまでずっと曖昧さを考えてきたのは、グラフのピークあたり、つまり人が刺激に対して通常の注意を向けていられるレベル帯についてであった。敏感さ、油断のなさ、興奮性がさらに高まると、情緒的混乱をきたす。火事や自然災害に遭遇したとき、客観的にはそれほど危険が迫っていなくても、動揺してしまって適切な行動がとれなくなることなどがその例である。日常の生活から比べると、論理性をなくしたいわゆる訳のわからない混乱状態であり、これも曖昧さであるとみてよいと思われる。この場合に刺激事態としては火事や津波などであるが、それらは特に曖昧であるとは考えられず、個人内での高覚醒がもたらす心理状態の曖昧さのほうにポイントがある。

これらのことから、刺激よりも個人の心理状態のあり方に注目して、低すぎるあるいは高すぎる覚醒水準として、以前とはすこし性質の異なる曖昧さの種類を考えることができる。

◎ まとめの図式

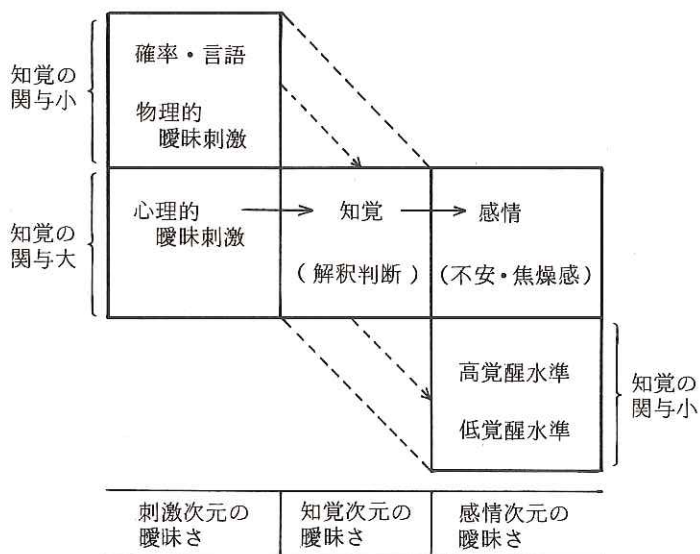


Fig. 5. 曖昧さの3次元と知覚の関与

以上述べてきた内容をよりいっそう単純に図式化したものがFig. 5である。曖昧さは刺激、知覚、感情という3つの次元において説明された。また知覚との関連の大小によっても分類がなされた。心理学でより多く扱われる曖昧さは、図中の実線矢印で示される「心理的曖昧刺激」→「知覚」→「感情」であり、これらは相互に密接な関係をもつ。斜めの破線矢印は、曖昧さを問題にする場合に知覚の関与が相対的に小さいことと、同時にまったく関与しないのではないことを示す。

なおこの図式のそれぞれのマスに曖昧さを意味するどのような形容詞が該当するかについてはここでは考えていない。そうした資料を参考にはしたが、曖昧な形容詞の種類や実際使用例

を多く集めることに主たる関心があるわけでない。「曖昧さ」の心理学的検討をメインとしてきたわけであるが、問題はまだまだ山積している。ひとくちに心理学といっても精神分析学の立場と実験心理学の立場とではずいぶん異なるし、なによりも「曖昧さ」の関係する領域は心理学だけではない。それはごく一部分にすぎないであろう。もっとさまざまな「曖昧さ」についてこれから調べ、それぞれの時点でさきの図式は修正されるであろうし、そうしたうえで「曖昧さ」の有効な利用を考えていきたいものである。

引用・参考文献

- Budner, S. 1962 Intolerance of ambiguity as a personality variable. *J. Pers.*, 1962, 30, 29-50.
- Eiduson, B. T. 1958 Artist and nonartist: A comparative study, *J. Pers.*, 26, 13-28.
- Frenkel Brunswik, E. 1948 Tolerance toward ambiguity as a personality variable. *The American Psychologist*, 3, 268.
- Frenkel Brunswik, E. 1949 Intolerance of ambiguity as an emotional and perceptual personality variable. *J. Pers.*, 18, 108-143.
- Hebb, D. O. 1958 *A Textbook of Psychology*. 白井 常 1971 行動学入門—生物科学としての心理学— 紀伊国屋書店.
- Kubie, L. S. 1958 Neurotic distortion of the creative process. 土居健郎 1974 神経症と創造性. みすず書房.
- Norton, R. W. 1975 Measurement of ambiguity tolerance. *J. Pers. Assess.* 39, 6, 607-619.
- Saunders, D. R. 1963 Some measures related to success and placement in basic engineering research and development. Taylor, C. W. (ed.) *Scientific creativity*. 佐藤矩方 1969 創造性の能力と規準. ラテイス.
- Torrance, E. P. 1962 Guiding creative talent. 佐藤三郎 1971 創造性の教育. 誠信書房.
- 龜山貞登 1971 創造の心理. 誠信書房.
- 馬場礼子 1976 芸術の精神分析的研究. 岩崎学術出版.
- 一谷 疆 1974 実験人格心理学. 日本文化科学者.
- 石塚 満 1987 あいまいな知識の表現と利用. 上野晴樹, 石塚 満(編) 知識の表現と利用, 141-184. オーム社.
- 牧野達郎; 東 洋, 大山 正, 詫摩武俊, 藤永 保(編) 1973 心理用語の基礎知識, 有斐閣.
- 向殿政男 1988 ファジィ理論がわかる本. HBJ出版局.
- 小此木啓吾, 馬礼子 1972 精神力動論. 医学書院.
- 菅野道夫 1988 ビジネスマンのための「ファジィ」読本. サイエンス社.
- 山内光哉(編) 1978 学習と教授の心理学. 九州大学出版会.
- 吉川 茂 1978 Ambiguity Tolerance と創造性に関する一研究. 関西学院大学文学部教育学科研究年報, 4, 47-58.

(1989年2月10日受理)